SHORT ESSAY

手づくりの展覧会

阿部　健一

Ken-ichi Abe

あべ・けんいち　宇和島東高校・京都大学卒業。京都大学東南アジア研究センター助手を経て、現在国立民族学博物館・地域研究企画交流センター助教授。専門は、熱帯林生態学・アジア環境史。1981年に青年海外協力隊員としてマレーシアに赴任して以来、東南アジア各国で人と森林についてのフィールドワークを続けている。

ちいさな展覧会を試みた。題して「みんなでつくる環境ポスター展」。ニッセイ財団の助成で、松山市の桑原小学校の生徒諸君と先生方そして愛媛大学農学部の協力を得た。

地球平和環境財団と国連環境計画（UNEP）が、世界中の子供たちを対象に、環境ポスター・コンテストを開催している。テーマは二十一世紀に残そう美しい・海・森・空。海外からは毎年四千点ほどの応募がある。すべての応募作品は国立民族学博物館に寄贈される。その関係で、ぼくも審査員の一人に加わっている。

優秀作や佳作を選ぶのに丸一日かかる。子供たちが一生懸命描いた絵だから、選ぶ方も真剣である。最優秀作を選ぶ段になると、審査員のあいだで議論が白熱する。これが結構楽しい。自分の選んだ絵の魅力を力説する。誰かが「そんな見方もあるのですね」といってくれたらしめたものである。

同じ愛媛出身の俳人・坪内稔典さんに句会の楽しみを教えてもらった。坪内さんによれば、句会は皆で鑑賞・批評するところに特色がある。「皆で」というのがミソで、閉ざされた個人を他人に開く文化装置にもなる。審査会での楽しさは、句会のそれに通じるところなのだろう。

松山での展覧会では、生徒全員に、この環境ポスターの中から、自分の好きな絵を選んでもらうことにした。そのうえで、どこが気に入ったのか、一人ひとりが「解説書」を書く。タイトルもつけてもらおう。皆が学芸員となって、手づくりの展覧会をするのである。

当日。生徒たちは神妙な顔でテーブルについた。十人足らずのグループに分かれている。やがて、テーブルごとに環境ポスターの包みが開けられた。その瞬間、会場全体が急に明るく賑（にぎ）やかになった。あちこちで、目を輝かせて会話が始まった。相互批評・鑑賞する楽しさ、つまり句会の楽しさが会場に満ちあふれた瞬間だった。